

## 第三者の存在が会話中の表情に及ぼす影響

—表情の時系列的変化の検討—

○山本恭子

(神戸学院大学)

Key words: 表情, 観察者, 関係性

### 目的

日常生活において、コミュニケーションは当事者以外の第三者が存在する状況において行われる。山本(2009)は、面識のない観察者の存在が、友人または未知関係のペアの表出行動に及ぼす影響を検討している。その結果、面識のない観察者の存在は未知ペアの表出行動を促進する一方、友人ペアには影響を与えないことを見いだした。しかしながら、友人同士においても、大学の教室内など知人のみが周りに存在する場合と、バスや電車の中といった見知らぬ他人が存在する場合では、感情表出の様式は異なることが推測される。

二者間の表出行動は時間経過に伴って、印象などの主観的指標との関係が変化することが示唆されている。会話の進行に伴うこのような変化も、観察者との関係性によって異なるのではないだろうか。

そこで本研究では、友人関係のペアを対象に、観察者との関係性が会話の進行に伴う表情の変化や、表情と主観的指標との関連性に及ぼす影響を検討する。

### 方法

■実験参加者：大学生の同性友人ペア 29 組 58 名（男性 11 組，女性 18 組）。観察者との関係性により、観察者なし群、未知観察者群、友人観察者群の 3 つに群分けした。

■質問紙：1) 一般感情尺度（小川ら，2000）：4 件法，24 項目。肯定的感情（PA），否定的感情（NA），安静状態（CA）の 3 つの下位尺度からなる。2) 公的自意識：菅原の自意識尺度から抜粋した 6 項目，7 件法。なお，実験中の状態を問うため，小川ら（2007）を参考に質問項目を改変して用いた。3) 内的他者意識：他者意識尺度（辻，1993）の 7 項目を，状態を問う質問に改変して用いた。7 件法。4) 会話満足度（木村ら，2005）：6 項目，7 件法。

■手続き：実験室内には、プロンプター（TV モニターとハーフミラーが一体化した隠し撮り用の装置）と実験参加者が着席する椅子 2 脚を設置した。また、観察者が着席する椅子を実験参加者から約 3m 斜め前方の位置に設置した。教示を行った後、実験参加者に快感情を喚起するビデオ映像を 2 分間呈示した。次に、視聴した映像について 5 分間自由に会話させた。会話後には、質問紙 1~4 に回答を求めた。観察者のある群では、観察者がメモを取りながら観察を行った。

■表出行動の測定：実験中に撮影したビデオに基づき、2 名のコーダーが、笑顔・視線・発話について、会話前半と後半の累積時間を算出した。コーダー間の一致率は  $r = .74-.95$  であった。分析には 2 名のコーダーの平均値を用いた。

### 結果

■表出行動：会話中の笑顔，視線，発話の累積時間について、群×期間を要因とする分散分析を行った。その結果、笑顔の累積時間（図 1）において交互作用が有意であった（ $F(2, 43)=3.64, p<.05$ ）。単純主効果の検定の結果、観察者なし群と未知観察者群において期間の単純主効果が有意であり、前半から後半にかけて笑顔の減少が認められた。友人観察者群では期間の単純主効果は有意でなかった。

視線の累積時間については、期間の主効果のみが有意であ

り（ $F(1, 43)=1.22, p<.05$ ）、前半から後半にかけて累積時間の減少が認められた。発話の累積時間においては、群の主効果が有意傾向であった（ $F(2, 43)=2.46, p<.10$ ）。

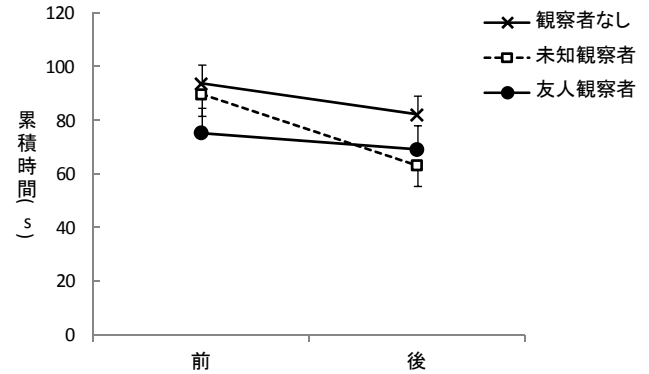


図 1 笑顔の累積時間の群×期間別平均値。

■表出行動と主観的指標との相関関係：群×期間別に表出行動と主観的指標との Pearson の積率相関係数を算出した（表 1）。その結果、笑顔については、未知観察者群でのみ有意な相関が認められた。会話前半は内的他者意識と有意な正の相関を示したのに対し、会話後半は PA 得点や会話満足度と有意な正の相関を示した。

表 1 表出行動と主観的指標との相関関係。

		笑顔		視線		発話	
		前	後	前	後	前	後
観察者なし (n=16)	CA	-.04	.25	.55 *	.33	.55 *	.25
	NA	.22	.02	-.32	-.28	-.24	-.02
	PA	.29	.34	.17	.02	.19	-.12
	会話満足度	.12	.34	.34	.40	.45	.20
	公的自意識	.08	-.15	-.20	-.27	-.58 *	-.60 *
	内的他者意識	-.06	.08	.14	.20	-.31	-.36
未知観察者 (n=18)	CA	.26	.06	.08	-.23	.17	-.08
	NA	-.22	-.39	-.46	-.51 *	-.29	-.40
	PA	.41	.63 **	.48 *	.56 *	.02	.17
	会話満足度	.25	.56 *	.51 *	.58 *	.11	.42
	公的自意識	.06	-.15	-.11	-.18	-.29	-.33
	内的他者意識	.52 *	.40	.16	.06	.03	.19
友人観察者 (n=12)	CA	.42	.54	-.05	.12	.06	-.10
	NA	-.25	-.01	-.11	-.29	-.23	.10
	PA	.48	.30	-.28	.05	.30	.34
	会話満足度	.39	.04	-.04	.19	.22	.19
	公的自意識	-.14	-.04	.24	-.01	-.55	-.28
	内的他者意識	-.08	-.35	.18	-.07	-.68 *	-.08

### 考察

笑顔の累積時間について、友人観察者群では期間による差がなかった一方、観察者なし群や未知観察者群では前半から後半にかけて減少を示した。このことから、友人観察者の存在は笑顔を維持させる働きを持つことが示唆された。先行研究結果（山本，2009）と一致し、未知観察者の存在は友人ペアの表出行動に影響しないことが示唆された。

笑顔と主観的指標との相関関係を見ると、未知観察者群でのみ有意な相関が認められた。未知観察者群では、会話の進行に伴い、他者意識を反映する笑顔から、個人のポジティブ感情を反映する笑顔にシフトすると考えられる。

(Kyoko YAMAMOTO)